

# 法学部でない学部生による著作権関係裁判例のグループ学習活動による教育効果の分析

○浦田優子（法政大学（院））、○小田友理恵（法政大学）、末宗達行（金城学院大学）

## 1. はじめに

知的財産法の理解の重要性が高まるに伴い、法学を専門としない学部であってもその理解を深める必要性が高まっており、さらには、その理解において、裁判例を通じた「生きた法」を学ぶことが求められている。また、経済産業省（2022）が次世代に求められる根本的な意識・行動面に至る能力や姿勢の一つとして「多様性を受容し他者と協働する能力」を求めていることからすると、大学の枠を超えてチームを編成し、協力して目標を達成する取り組みを大学学部生の期間で経験することは、教育上重要な意義を持つと考えられる。このような背景を受けて、約5か月の準備期間を経て、2022年12月27日に開催した「第30回知的財産判例セミナー」では、山口大学と金城学院大学の学生が大学の枠を超えて協力し、著作権関連の裁判例を題材とした研究発表を実施した。報告者らは、法学部でない学部生が知的財産法関連の裁判例の内容及び意義を学習し、その成果を一般公開のセミナーにおいてプレゼンテーション形式で発表を行う取り組みに参加することによって、当該取り組みの教育効果がどのようなものであったか、またどのような精神的な成長を遂げたのかを明らかにするために研究を実施している。

なお、本報告は、〔ポスター発表〕小田友理恵＝浦田優子＝末宗達行「非法学部所属の学部生による知的財産関係裁判例学習およびプレゼンテーションの実施を通じた教育効果および学生の成長」TEAと質的探究学会第2回大会（2023年6月11日、立命館大学）、〔口頭発表〕小田友理恵＝浦田優子＝末宗達行「法学部ではない大学生が著作権裁判例についてグループで学ぶ意義」知財教育FDセミナー第9回（2023年10月31日、山口大学・オンライン）、〔口頭発表〕末宗達行＝浦田優子＝小田友理恵「知的財産法関連の判例発表会による非法学部学生の学習と成長の要因」日本知財学会第21回年次学術研究発表会（2023年11月18日、オンライン）（予稿集提出時点では予定）における発表内容をもとに、追加・修正を行ったものである。

## 2. 調査概要

### <方法>

研究協力者は、「第30回知的財産判例セミナー」にて発表を行ない、そのための準備でグループワークを体験した大学生3名であった。2023年3月～10月にかけて一人につき3回ずつ、第1著者がインタビューを実施した。データ取得と分析の枠組みとして今回用いたのは、心理学の分野で質的な研究方法として用いられることが多い複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach; 以降TEAと略す）（安田・滑田・福田・サトウ, 2015）であった。研究者が関心を寄せる事象を「等至点（Equifinality Point: 以降EFPと略す）」として定め、そこに至るまでの複数の径路を描き出すことを目標としてインタビューを実施した。「1/4/9の法則」に従い、4名±1名に該当する3名で多様性を探った。プロセスを視覚化した図（TEM（Trajectory Equifinality Modeling）図と呼ばれる）を作成し、研究協力者とともに理論的飽和を目指した。なお、インタビューはビデオミーティングアプリZoomを利用してオンラインで実施した。初回インタビューでは、適切な等至点を設定してTEM図を描くことを目的として、第3著者が中心となり適宜参照可能なインタビューガイドを作成して手元において参照したうえで、非構造化面接を実施した。初回インタビュー後に第1著者が逐語録を作成し、プロセスに関わる語りを抽出・ラベリングし、仮のEFP「判例発表会を通じた成長の自覚」で暫定的なTEM図を作成した。径路には社会や環境の側から影響を及ぼす社会的助勢（Social Guidance）および社会的方向づけ（Social Direction）も描き込んだ。その後、第1著者と第2著者で逐語録とTEM図を共有して協議して修正し、次回インタビューの論点を確認した。2回目のインタビューでは、作成した暫定のTEM図を研究協力者に示しながら、対話しTEM図に共同で修正を加えた。2回目のインタビュー後に、第1著者と第2著者で本質的な変更は加えず理論的な観点からTEM図の微調整を行った。3回目のインタビューでは、調査協力者に最終的なTEM図を提示して確認してもらい、インタビューの振り返りを行った。本研究に特徴的な点として、分析は現象学的な質的研究方法であるTAE（Thinking at the Edge: Gendlin, 2004）を援用し、第1著者と第2著者がフェルトセンス（身体で感じられた意味）を言語化し、共有しながら行われた。

### <結果および考察>

インタビューデータを分析した結果、学生たちは判例発表会完遂までの間に各々試行錯誤しながら

取り組んでおり、その過程を経て精神的な成長を遂げながら学びを深めていることが明らかとなった。

まず、学習のプロセスについて認知的な側面から検討を行う。調査協力者が語る判例理解の漸次的プロセスは、福島(1995)の記述を引用すると「主体が持続的にスキルを向上させていく単線的な過程」ではなく「社会的なネットワークの中での相互作用を通じて変化していく過程」であったと想定され、「一連の複雑なタスクに従って、必要な事は状況に応じて体得していかなければならぬ」であったと考えられる。こうしたプロセスは、認知的徒弟制(Brown et al., 1989; 荻野, 2006)という概念に相当する。判例発表会でのグループワークにおける学習は、講義形式のような従来の意図的な教授方法とは異なり、グループの成員同士および教員との相互作用を通じて具体的な判例に取り組むという文脈に埋め込まれた状況でなされた。すなわち、判例発表会のグループワークにおける学習は、こうした文脈における文化的適応(荻野, 2006)の過程であったとみなされる。

また、認知的徒弟制と関連する概念である正統的周辺参加(Lave & Wenger, 1991 佐伯訳 1993)に準ずる現象も生じていたと考えられる。アイデンティティを確立していく青年期にいる学生たちにとって、グループという社会的共同体の実践に参加して他大学の上級生と交流をする体験そのものが、アイデンティティの発達を促し、そのアイデンティティの発達そのものが、知財に関する学習を深化し、グループワークや発表のスキルの獲得を促したと考えられる。すなわち、青年期の調査協力者にとって、知財に関する宣言的知識とグループワークにまつわる手続的知識とは、アイデンティティの発達と不可分に影響し合いながら発展していったことが明らかとなった。

グループ成員間の相互作用により詳細に目を向けると、学生たちは個別に学習する中でソーシャルサポートを駆使しながら臨んでおり、それがグループワークに活かされていると考えられた。また、グループワークを通して他者と気持ちを共有することで、尊敬する人物を内在化しており、他者と気持ちを共有できたという体験が心の拠り所となっていることがうかがえた。

さらに、精神的な成長の観点で特筆すべき点として、グループワークを重ねることで当初は自己視点で物事を捉えていた学生が、他者のために行動するという行動変容が見られた。この行動変容における人間的な成長はV.E. フランクル理論(Frankl, 2005 山田監訳 2011)における自己超越や体験価値の実現と捉えることが可能である。

以上のように、一般的には可視化することが難しい認知的な学習過程および精神的な成長を、プロセスを扱う質的心理学の方法によって捉えることができた。本研究の知見によって、教員がグループワークを学生に行わせる際に、認知的な学習効果に限らない、精神的な成長も含んだより広い視野を持って学生と接し、学習をサポートすることが可能となる。しかしながら、本研究では法学部ではない学生たちがどのようにして判例を読めるようになったのかという認知的な側面に関しては、仮説を挙げるに留まっている。学生たちが未学習の形式の文章をどのように読み、理解するようになっているのか、その過程を実証的に明らかにできれば、指導時の留意点などに関してより具体的な示唆を提供できると考えられる。

#### 【謝辞】

本研究を実施するに際しては、生田容景准教授(山口大学)、小川明子教授(山口大学)及び陳内秀樹准教授(山口大学)(五十音順)より、丁寧なご指導、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。もっとも、残された誤り等については、報告者らの責めに帰すものです。

#### 【引用文献】

- 1) 経済産業省(2022). 未来人材ビジョン, 16頁.
- 2) 安田 裕子・滑田 明暢・福田 茉莉・サトウ タツヤ(編)(2015). ワードマップ TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ 新曜社
- 3) Gendlin, E. T. (2004). Introduction to thinking at the edge. *The Folio*, 19(1), 1-8.
- 4) 福島 真人(編)(1995). 身体の構築学——社会的学習過程としての身体技法 ひつじ書房
- 5) Brown, J. S., Collins, A., & Duguid, P. (1989). Situated cognition and the culture of learning. *Educational Researcher*, 18, 32-42.
- 6) 荻野 美佐子 (2006). 12章 知的機能の発達的变化 海保 博之・楠見 孝 (監修) 心理学総合事典 (p. 300) 朝倉書店
- 7) Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge university press.  
(レイヴ, J. ウィンガー, E. 佐伯 胖(訳)(1993). 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加 産業図書)
- 8) Frankl, V. E. (2005): *Ärztliche seelsorge: Grundlagen der logotherapie und existenzanalyse*. Wien:Deuticke Im Zsolnay Verlag.  
(フランクル, V. E. 山田 邦男(監訳)岡本 哲雄・雨宮 徹・今井 伸和(訳) (2011): 人間とは何か—実存的精神療法 — 春秋社.)